

## 【第108話】 厨ニワールドへようこそ

聞き慣れた振動音が鳴っている。しつこい、と心の中で呻いて隆史は無意識にポケットを探った。引っ張り出した携帯用端末を片手で操作しながら薄く目を開ける。携帯用端末の画面の端にある時計が真っ先に目に留まる。

誰だ。こんな夜中に。そんなことを思いながらメール画面を開いたところで隆史はぎょっとして目を見張った。知らないアドレスからのメールが何件か並んでいる。もしかして新卒の嫌がらせか、と考えて慣れた手つきで削除しようとした瞬間、隆史は息を飲んで慌てて画面を凝視した。

件名のないメールが何本か着ている。隆史は眉を寄せながら履歴の古いものから開いてみた。ずらりと文章が並んでいる。

『今日は本当にありがとうございました(≧▽≦)ノ～♪ 常識的なことも知らなくて迷惑お

かけしたと思いますごめんなさい。° (。ノω  
ゝ。)°。』

隆史はそれを見て思わず苦笑を浮かべた。メッセンジャーソフトから送信しているのか、ぶつ切りの短文のメールになってこちらには届いている。どうやらこの一連のメールの差出人は有香らしい。次のメールを開いてみる。

『もう、真実から目をそらすのはやめます。ヒューマノイドとして動作しつづけていくためにどうすればいいか、学んでいきたいです(´・ω・´)』

隆史は文面を見ながら身体を起こして頭をかいた。そこで息を飲む。

隆史は慌てて周囲を見回した。ここはどこだろう。ベッドに寝ていたようだが、知らない場所だし、ベッドに入った記憶もない。

隆史は記憶を辿ってため息を吐いた。そう

いえば栄というヒューマノイドと話している最中に急に眠くなった。

「まさかの寝落ちかよ。何してんだ、俺」

冗談じゃねえ、とぼやきながら隆史は次のメールを開いた。

『あ、いま大変なことに気付きましたΣ (°  
∩° ;) カラオケの代金も、ショーツの代金も隆史さんにお支払いしてもらっちゃってますよねσ(○∩○Ⅲ)』

それを読んだ隆史は少しだけ気分が楽になった。今さらかよ、とここにはいない有香に突っ込みを入れてみる。

『今度お会いした時に、メンテナンス代金と一緒に必ずお返しします！ それでは、またお会いしましょう(´・ω・`)♪』

続けて読んだメールにはそう書いてあった。はいはい、と言いながら隆史はベッドを

降りようとした。そこでベッドサイドのテーブルに一枚の便せんが置かれていることに気づく。

隆史くんへ

今日は付き合ってくれてありがとう。  
疲れていたみたいね。食事を先にしてよかったです。

隆史くんは残念だったのかな？ そう思ってくれていたら嬉しいけど。

隆史くんが寝てしまってすぐに私のマスターから連絡がありました。

結果だけ言うと、つばさちゃんを再調査するように命じられました。

隆史くんならこれだけ言えばわかると思います。

無用なリスクを隆史くんに負わせてしまってごめんなさい。

再調査の結果が出たら、また連絡します。

今後、隆史くんに会えるかどうかわかりません。もし、マスターに許可を貰えたら、謝罪したいです。

本当にごめんなさい。

栄

整った綺麗な字で書かれた文章を読んで隆史は舌打ちをした。

「やっば、食わずに食ったときゃ良かったんだ。くそ」

これなら食事などせずに栄を押し倒しておいた方が良かった。しかもこの様子では栄と再会するチャンスはないかも知れない。二度とない絶好の機会を逃したのと同時に、隆史は自分が負ったリスクについても理解していた。

ここは普通のホテルではない。個人情報を外に漏れることは絶対になく、同時に外から

何者かに襲われる心配もない場所のはずだった。なのに隆史はそんな場所で急に眠くなり、そのまま気を失うかのように寝てしまった。

仮に急に眠くなったとしても、あの意識の落ち方は変だ。となると、食事か何かに薬が混ぜてあったと考えるのが自然だ。だが、このホテルの警戒は厳重で、外部から中の人間の食事に何かを混ぜるなど不可能だ。

可能性だけなら色々と考えられる。だが、どのみち危険な状況に置かれているということは判る。だから栄がわざわざ置き手紙で詫びているのだろう。それにつばさを再調査すると書かれている。結衣のことを疑っていると言っていたが、同時に栄はつばさについても調べるつもりのようなのだ。

結衣とつばさの二者を結ぶのは保美以外にいない。他にも関係している者がいるかも知れないが、まずは結衣の機体制作者が誰なのかを調べた方が早いだろう。隆史は険しい表情でそう考えながら無意識に次のメールを開

いた。

メールを見て隆史は硬直した。

『隆史さん、今、矛盾するエラーメッセージが出ています。片方は致命的なアラートで、もう一方は深刻なアラートです』

送り主はやはり有香だ。隆史は慌てて次のメールを開いた。

『致命的なアラートは、Mechanical Brain Unit が損傷する可能性があるので、自慰の真似事を即時停止するように求めています』

Mechanical Brain Unit は機械化脳のことだ。隆史はメールを表示させたまま、ベッドルームを駆け出した。部屋を出て一階のロビーに向かうエレベーターに飛び乗り、次のメールを開く。

『深刻なアラートの方には、自慰の真似事を実行しないと Mechanical Brain Unit に悪い影

響を与えると書かれています』

『わたしを管理する技術者に連絡するようにと書かれています、わたしは、連絡先を知りません』

『どうすればいいか、助言を頂けたら嬉しいです』

『甘えてしまっておめんなさい』

立て続けに四通のメールを開いた時には隆史はホテルのロビーから外に駆け出していた。機械化脳が損傷するようなアラートが出るということは、有香の機体に何らかの問題が生じているか、精神的なストレスが限界を越え、精神崩壊が始まっているか……何にしても凄まじく切羽詰まった状況であることに違いはない。

有香が住んでいるマンションに向かって走りながら、隆史はメールを見返してみた。が、どう読んでもやはり有香が緊急事態に陥っているとしか読めない。

走って五分もかからない場所にそのマンシ



ョンはあった。ロビーに入ったところでセキュリティに阻まれる。隆史は舌打ちしながら有香のいる部屋の番号をセキュリティシステムの端末に打ち込んだ。

コールして有香が応じてくれれば玄関を守る分厚いガラス戸は開く。それに有香の部屋のロックも解除されるだろう。だが、もしも出来なかったらどうすればいいだろう。

『はい。鹿取……です』

端末画面は暗いままだが、スピーカーから有香の震えた声が聞こえてくる。隆史は思わず端末に顔を寄せて叫ぶように話しかけた。

「有香！ 俺だ！ 玄関を開けられるか！？」

頼む、開けてくれ。隆史は心の底からそう願いながら有香の反応を待った。

『隆史さん！ 今、来客案内依頼を出しました……。ドアが開いたら、警備員の方が居ら

っしゃると……思うので、身分証明になるものを……渡してください』

まるで熱に浮かされたような喋り方だ。有香の声を聞いた直後に隆史はガラス戸の方へ駆け出した。ぶつかる直前にガラス戸が開き、エレベーターのある場所に向かおうとした隆史の前に警備員が現れる。思った以上にセキュリティレベルが高い。

隆史は急く思いを堪えて身分証代わりになる学生証を警備員に見せた。すると警備員が手を差し出す。

「認証のためにお預かりしてよろしいでしょうか？」

よくあるタイプのヒューマノイドの警備員だ。ごり押しで通ることも出来るが、それは同時に警備会社に通報されることにもなる。隆史は無言で頷いて学生証を警備員に渡した。

「お手数をおかけします。こちらへ」

頷いた警備員が示したのは警備員室だった。どうやら認証が終わるまでは通してもらえそうにない。

「あの、急ぐので、早くしてもらえませんか？」

言っても無駄だと判っていても、つい口について言葉が出てしまう。だがそんな隆史を見返った警備員がもう一度、警備員室を指し示す。警備員室の前にはもう一人の警備員が立っていた。警備員室に向かって歩き出した警備員が口を開く。

「認証に要する時間は一分ほどです。申し訳ありませんがお待ちください」

一秒でも惜しいと思っている隆史にとって、一分は長かった。が、待つしかない。仕方なく隆史は警備員に付いていった。

「ゲスト一名。6701。入館」

隆史を連れた警備員が待ち構えていた警備員に告げる。すると待ち構えていた方の警備員が差し出された隆史の学生証を受け取り、警備員室内に入って端末機にそれをかざす。

「認証完了しました。ご協力ありがとうございました」

認証を行った警備員がそう言って会釈をし、最初の警備員に学生証を差し出す。早く有香の様子を見ないと、と気が急いていた隆史は、どうも、とだけ返した。学生証を受け取った警備員が、今度はそれを隆史に差し出す。

「ご協力ありがとうございました。それでは、ご案内します」

どうやらここからも警備員に付いていかなければならないようだ。一刻も早く駆け出したいのを堪えて隆史は学生証を受け取り、頷

くだけの返事をして警備員について歩き出した。警備員が向かったのは六〇F～と書かれたホールの最奥のエレベーターが並んだ場所だった。警備員がボタンを押すと、三基並んだエレベーターのうちの一基のランプが灯る。

ここに着いてから三分以上経っている。隆史は焦る気持ちを抑えられず、携帯用端末の画面に表示された時計を何度も見た。十数秒後、ランプが灯ったエレベーターのドアが開く。するとメイド服を着た女性がエレベーターから降りて会釈をし、道を空ける。

これもヒューマノイドか。隆史はすれ違ったメイドがヒューマノイドであることを一見しただけで判別していた。それだけではない。警備員も見た瞬間にヒューマノイドだということは判った。いつもならもっと慎重に観察し、結論を出すのだが、この時の隆史は直感だけでヒューマノイドを見分けていた。

警備員が乗り込んだエレベーターに隆史は

無言で乗った。警備員の案内がなければ部屋にも通してもらえないようだ。警備員の動きが特に遅い訳ではないのだが、一刻を争うという事態に陥っている有香のことを考えると、どうしても鈍く感じられる。

上から二番目のボタンを押した後、警備員が素早くエレベーターのドアを閉じるボタンを押す。急いでくれているということは判るのだが、ボタンが押されてからドアが閉まり始めるまでの間ですら長く感じられて焦れたい。

高層マンションのエレベーターが急上昇する。一気に有香のいる階に向かっているのだろう。隆史はエレベーターの壁に埋め込まれたパネルに表示された文字を苛々しながら見上げた。十階、二十階、三十階と数字がどんどん増えていく。

エレベーターが少しずつ減速する。途中、一度も止まることなく六十七階に辿り着いて扉が開く。すると警備員が一礼した。

「到着いたしました」

「ありがとう」

隆史はそれだけ言ってエレベーターから駆け出した。目の前にあるドアは旧式の鍵がつけられている。だが恐らくロックはされていない。これだけセキュリティが厳重なら、マンション内に無断侵入することはほぼ無理だ。それにこの階には一つしかドアはない。フロアの全てが有香の家、ということなのだろう。他の階の者が侵入する可能性もなくはないが、恐らくそれは無理だ。入り口をあれだけ固めているのなら、エレベーター内やマンションの廊下には監視用のカメラが確実につけられている。

隆史はためらいなくドアのノブを引いた。予想通り、有香の家のドアは簡単に開いた。中に飛び込みながら隆史は有香を呼んだ。玄関で靴を脱ぎ捨てて廊下を進む。

「隆史……さん……たすけて！」

震える声が聞こえてくる。隆史は声のする方に向かって走った。幾つかの部屋の前を過ぎ、一番奥の部屋に辿り着く。僅かに開いたドアをいっぱいに開けて部屋に飛び込んだ隆史は、倒れた有香を見つけて慌てて抱き起こした。

～立ち読み版はここまでです～